



TITLE:

C.A.マクマリーのタイプ・スタディ  
論の形成と普及に関する研究ーカ  
リキュラムとその実践思想を読み  
解く 基盤ー( Abstract\_要旨 )

AUTHOR(S):

藤本, 和久

---

CITATION:

藤本, 和久. C.A.マクマリーのタイプ・スタディ論の形成と普及に関する研究ーカリキュラムとその実践思想を読み解く 基盤ー. 京都大学, 2016, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2016-11-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13057>

RIGHT:

(続紙 1)

京都大学	博士（教育学）	氏名	藤本 和久
論文題目	C.A.マクマリーのタイプ・スタディ論の形成と普及に関する研究 ーカリキュラムとその実践思想を読み解く基盤ー		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、19 世紀末の米国において勃興した、ヘルバルト主義運動（American Herbartianism）の事実上のオピニオン・リーダーであったチャールズ・マクマリー（McMurry, C.A., 1857-1929）の所論と活動の史的展開に焦点を合わせ、その初期段階からの創案である「タイプ・スタディ（type study）」概念の変遷に着目して、当時の米国のカリキュラム論史上の位置付けを探るとともに、タイプ・スタディがいかに学校現場に影響を与えたのか、さらにはタイプ・スタディの開発がいかに教員養成機能を果たしたのかを、極めて広範囲にわたる史料収集と緻密な史料分析によって考究したものである。なお、タイプ・スタディとは、他の教育内容にも応用が効く典型性（タイプ）のあるトピックを中心軸として物語化した大単元であり、その多くは教師・子どもの双方に向けた副読本として活字化されたものである。以下、各章の内容の要旨を簡潔にまとめたい。</p> <p>第 1 章では、米国ヘルバルト主義の受容・普及のプロセスを、それが対峙し克服対象とした当時の米国の授業形態である、「復唱」を中心とする「レシテーション」と対比しつつ、実際の授業例を引証して具体的に考察している。マクマリーにおいては、「レシテーション」を克服するなかで、初期の「中心統合法」から「相互関連法」へと転換し、後期において「プロジェクト法」に逢着したと分析している。</p> <p>第 2 章では、マクマリーのタイプ・スタディ論とその実践事例の史的変容に着目して検討を行っている。すなわち、1890 年代の米国ヘルバルト主義運動隆盛期においては、タイプ・スタディはカリキュラム概念の下位概念として説明的に使用され始め、1900 年頃から 1910 年代前半になると単元論として認識され地理・歴史に限定されて使用されていく。さらには、マクマリーのドイツ再訪を契機として、1900 年頃から 1910 年代前半にかけて、タイプ・スタディの教員養成機能が着目され、1910 年代後半から 1920 年代になると、プロジェクト論と合流しその意味を精錬していくと大別されている。マクマリーにとって、タイプ・スタディの教育内容と教育方法を統合した概念が「プロジェクト」であり、実生活を基盤とすれば「子どもの知的関心と思考」と「教科や知の合理性」は統覚作用（apperception）によって矛盾することなく統合されると考えられている。この立場こそ進歩主義と本質主義を架橋する立場であると自覚され、ここにマクマリーの米国カリキュラム論史上に占める独自性があると分析されている。</p>			

第3章では、マクマリーが直接指導した学生・院生の活躍やその後の道程にマクマリーのタイプ・スタディ論と教員養成論とがいかに融合したのかを考察している。マクマリー自身は、タイプ・スタディを現職教員と共同開発し、附属学校やプラクティス・スクールでそれを検証する過程で、カリキュラムが良質化していくことに加えて、指導学生たちの力量形成がなされていくことに着目した。しかしながら、マクマリーが指導した学生たちの多くは、学校経営学を専門とする者たちであり、タイプ・スタディのさらなる開発、普及に貢献することが必ずしも多くなかったという事実を実証的に指摘している。

第4章では、マクマリーらが、当時隆盛しつつあった教育の科学化をめざして、自らの理論をいかに補強・補正していたのかを検討している。タイプ・スタディの実践化が進展した1910年代半ばから1920年代にかけては、教育分野における科学化のプロセスが進行していた時代でもあった。とりわけ20世紀初頭の教育界においては、科学的な教育研究とは、社会的効率性の追求と量的調査やメンタルテストに代表される「教育測定」へと一気に拡大していく。マクマリーもカリキュラム領域を専門とする調査委員として各地で精力的に活動するようになる。このことが、タイプ・スタディを科学的な教授と位置づける場となり、普及の一因になったと指摘している。

第5章では、タイプ・スタディ論の醸成の場であり、検証と修正の場として機能したノーナル・スクールの附属学校機関におけるマクマリーの献身的な活動を実証的に紹介している。第6章においては、マクマリーの所論が全国の学校教育現場にいかなる影響を与えていたのかについて、地方教育誌や教育委員会報告等を史料として、具体的な教師や教育行政官たちの証言を手がかりにして検討している。その中で、とりわけサウス・カロライナ州のゴーガンズ（Goggans, S., 1888-1967）の提案が最もマクマリーの所論を的確に反映していることを見出している。その原因として、ゴーガンズ自身も郡の指導主事として、苦闘する現場の教員たちと「カリキュラムの精選」という課題を共有していたことがあげられ、まさにこの課題の解決こそタイプ・スタディが受容される文脈であったと指摘している。

以上、第3章から第6章を通じて、「(教授)理論と(教育)実践」との関係は、前者から後者への一方向的な伝達ではなく、理論形成と検証の過程と実践家固有の課題意識との間に適切な出会い（つまり共生・互恵的な関係）が生じる時に、その理論が現場に影響を及ぼすことができると総括している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、19 世紀末の米国において勃興した、ヘルバルト主義運動 (American Herbartianism) の事実上のオピニオン・リーダーであったチャールズ・マクマリー (McMurry, C.A., 1857-1929) の所論と活動の史的展開に焦点を合わせ、その初期段階からの創案である「タイプ・スタディ (type study)」概念の変遷に着目して、当時の米国のカリキュラム論史上の位置付けを探るとともに、タイプ・スタディがいかに学校現場に影響を与えたのか、さらにはタイプ・スタディの開発がいかに教員養成機能を果たしたのかを考究したものである。本論文の特徴は、多様かつ膨大なマクマリーに関する内外の先行研究を綿密に検討するとともに、さらには、全米に散在しているマクマリーに関する未公刊書簡や実践記録に至るまで博搜精査して、その理論構築に確かな実証的裏付けを行ったところである。

また、本論文を構成している各章は、2013 年デイトンで開催されたカリキュラムと教授理論研究会 (Bergamo Conference on Curriculum Theory and Classroom Practice)、2014 年ロンドンで開催された国際教育史学会 (ISCHE)、同年フィラデルフィアで開催されたカリキュラム史学会 (SSCH) において発表され、高い評価を得たものであり、さらに 2016 年シカゴの Loyola University で開催された国際教育史学会の課題研究 (テーマは Objects, Senses and the Material World of Schooling) のシンポジウムにおいて、著者は *convenor* (主催者並びに指定討論者) に抜擢されるなど、その学的力量は国際水準で認められているところである。ここでは、400 字詰原稿用紙約 1200 枚に及ぶ大作を、思い切って二つの柱に概括し、その学的意義を述べたい。

第一点は、従来の米国のカリキュラム論史上または教授理論史上において、進歩主義 (progressivism) と本質主義 (essentialism) の峡間にあつて、その歴史的意義を十分に吟味されることのなかったヘルバルト主義運動に関して、従来の先行研究においてほとんど研究対象とされることのなかった、マクマリーの創発した「タイプ・スタディ」概念の史的展開を実践記録の分析を踏まえて綿密に検討したことである。この作業によって、後期 (1920 年代の) マクマリーにおいては進歩主義と本質主義とを架橋するという壮大な展望を示していたことを明らかにし、米国カリキュラム論史上に占めるヘルバルト主義運動の固有の役割を指摘したことである。すなわち、「タイプ・スタディ」概念が「プロジェクト」概念と結合されるなかで、実生活を基盤とすれば「子どもの知的関心や思考」と「教科や知の合理性」は統覚作用 (apperception) によって矛盾することなく統合されると考えられたからである。

第二点は、本論文の通底にある課題意識として、カリキュラムまたは教授理論に関する専門家が、教育現場にいかに関与を与え得るのかについて、マクマリーの足

跡に即して実証的に明らかにしようとしたことである。マクマリーは、とりわけ 1913 年のドイツ再訪を契機として教師教育の重要性を自覚し、GPCT（George Peabody College for Teachers）の教員として、現職教員に「タイプ・スタディ」に関する単元開発を指導し、それらは修士論文として結実している。さらには NISNS（Northern Illinois State Teachers College）のトレーニング・スクールの指導者として、講演とともに演示実践を行いつつ、全米規模で精力的に「タイプ・スタディ」の普及に取り組んでいる。本論文においては、マクマリーに影響を受けた学生や教員たちの足跡を、地方教育誌や教育委員会報告等を史料として、個々の教師や教育行政官たちの証言を手がかりにして詳細に検討している。その結論として、「（教授）理論と（教育）実践」との関係は、前者から後者への一方的な伝達ではなく、理論形成と検証の過程と実践家固有の課題意識との間に共生・互恵的な関係が生じる時にこそ、その理論が現場に影響を及ぼすことができると総括している。本論文が示した課題意識である、（教授）理論家と（教育）実践家との関係性を探るという方法論は、教育方法学研究に新たな地平を拓く視角を与えたものと言えよう。

このように、本論文はチャールズ・マクマリーの所論と来歴に焦点に合わせ、関係する資（史）料を全米規模で博搜精査した、労作として高く評価できよう。なお、試問においては、論文全体の構成をみた時、理論家と実践家との関係性を探るという課題に相対的重点が置かれたために、たとえば「タイプ・スタディ」概念とキルパトリック（Kilpatrick, W. H., 1871-1965）の「プロジェクト」概念との異同を検討する理論的、思想的課題の追究や、当時の米国の歴史社会的状況をマクマリーがいかに認識していたのかを問う社会認識的課題の追究などに、なお残された課題があるのではないかという指摘がなされた。

このように本論文には今後の課題を残すものの、それらは本論文の学問的意義を否定するものではなく、本人もそれらの課題を自覚してさらに研究に邁進する決意を示している。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 28 年 9 月 2 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日： 年 月 日以降